

2024 年度 自己点検・評価活動について（報告）

1. はじめに

2024 年度は、新たに導入したシステムで自己点検・評価を実施する 4 年目である。教育の質保証、内部質保証を行っていくために自己点検・評価は必須であり、その意味（点検・評価を行う意味）を全教職員が理解しながら、今年 1 年間の業務を振り返ってもらえるように進めた。

今年度については、「組織レベル」「個人レベル」はこれまでと同様に、「自己点検・自己評価した結果を他者が評価するという相互確認の方法」で自己点検・評価シート実施した。一方「全学レベル」については、「事業計画書（中期経営計画に基づいた中期目標・計画を含む）」を基点とした「教学に係るアクションプラン」による自己点検・評価とした。

2. 実施スケジュール

2024 年度の実施スケジュールは、図 1 の通りである。

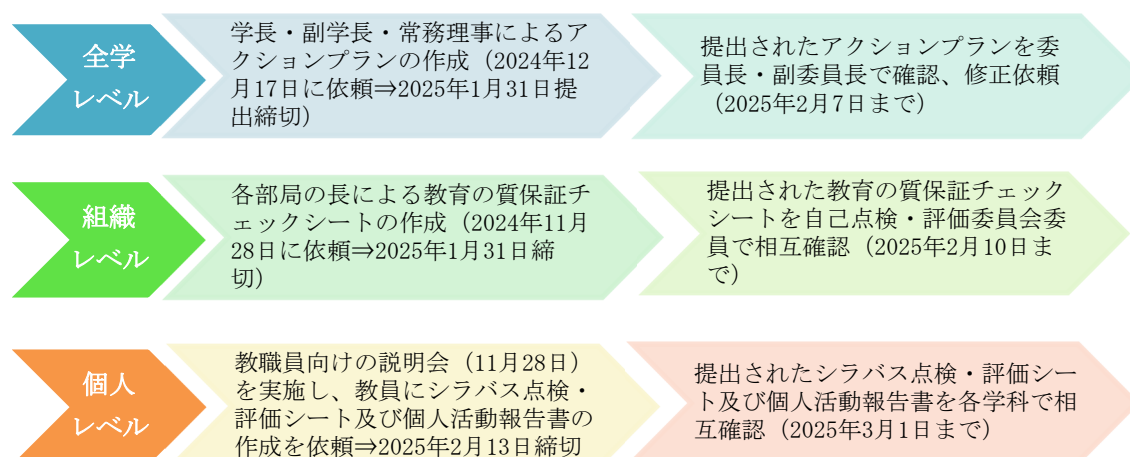


図1 自己点検・評価の実施スケジュール

3. 自己点検・評価結果について

（1）全学レベル（教学に係るアクションプラン）

「教学に係るアクションプラン」は、学院の事業計画に必要な事項を追加し、教育・研究活動を中心とする内容で 2022 年度より作成し、自己点検・評価と連動させ、大学としての PDCA サイクルを回していくために実施してきた。主要課題は、「A: 教育のさらなる充実と内部質保証の確立」「B: 学生支援の充実」「C: 学生募集の戦略的強化」「D: 研究力の強化」「E: 多様なステークホルダーとの連携強化」「F: グローバル化の推進」「G: 教育研究の DX 化の促進」の 7 区分である。

点検・評価については、各項目の担当責任者（学長・副学長・常務理事）が担当部署と連携し、当該年度の実績及び進捗状況と課題についての点検を行い、0～5 点の評価点を記入する。その後、次年度重点事項の具体的施策、KPI の到達目標値、行動計画を加筆している。

項目についての見直しも併せて行っており、内容に関しては、執行部会議で確認され、部局長会議での審議が行われる。

評価の指標は、次のとおりである。

【評価の指標】

- ◇未着手：「0」
- ◇検討着手(現状を確認し課題の洗出し中。(実施を 100 とした場合)達成状況 20%)：「1」
- ◇検討中(検討組織で草案を作成し審議中。達成状況 40%)：「2」
- ◇検討最終段階(学科等の意見聴取を経て修正案取り纏め中。達成状況 60%)：「3」
- ◇目標達成前(修正案を審議し最終調整。達成状況 80%)：「4」
- ◇目標達成 (予定含む)(100%)：「5」

今年度の主要課題ごとの評価点の状況を図2に示す。

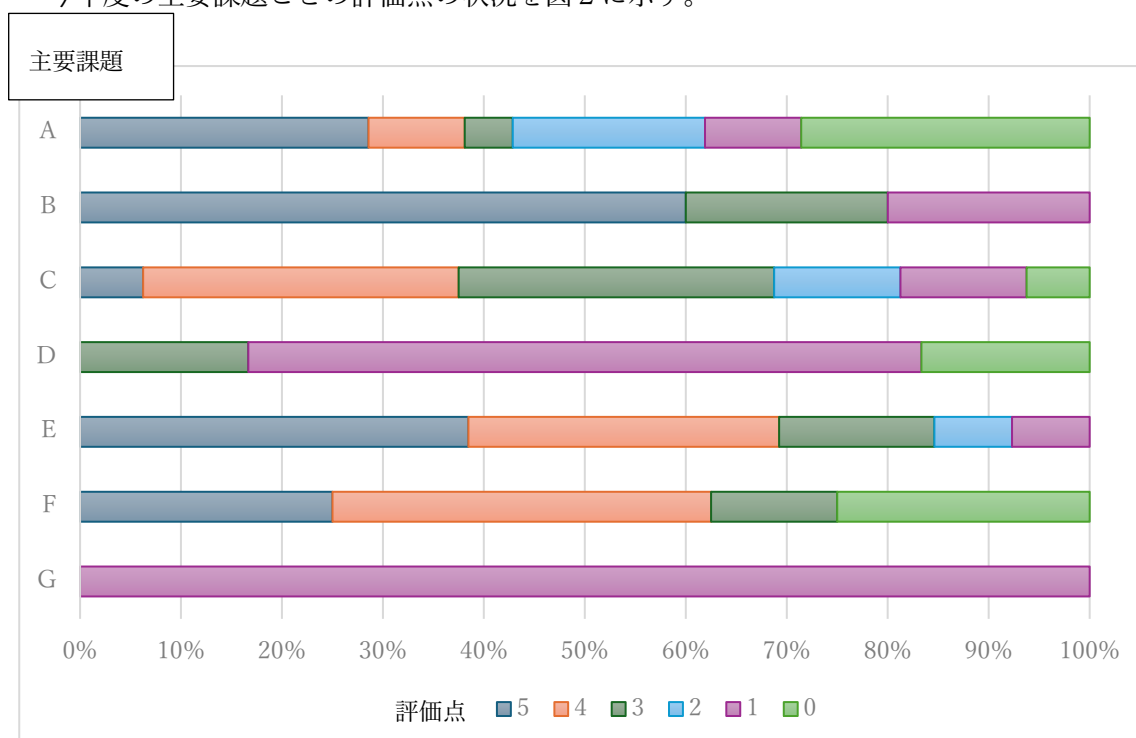


図2 主要課題ごとの評価の状況

「A: 教育のさらなる充実と内部質保証の確立」

「B: 学生支援の充実」

「C: 学生募集の戦略的強化」

「D: 研究力の強化」

「E: 多様なステークホルダーとの連携強化」

「F: グローバル化の推進」

「G: 教育研究のDX化の促進」

なお、主要課題それぞれの平均点は下表の通りである。

表1 主要課題の平均点

主要課題	A	B	C	D	E	F	G
項目数	21	5	16	6	13	8	3
総 点	51	19	46	7	50	25	3
平 均	2.43	3.18	2.86	1.17	3.85	3.13	1.00

また、未着手及び検討着手の状況（0点～1点）の具体的な課題を表2～3に示す。

表2 未着手の重点事項と具体的施策

	R6年度重点事項	R6年度重点事項の具体的施策
A	教育プログラム・制度の充実	CAP制度の緩和に係る対象科目の選定を行い、令和7年度の便覧に反映できるよう進めていく。
	成績評価の厳格化及び透明性の確保	令和7年度からの実施に向けて具体的な方針及び周知方法について検討する。（秀の割合） 各学科において、学修成果指標について理解を深め、策定について検討する。
	教育の質保証の実質化	協定校とのFD研修会の検討
	多様な教育体制と社会との連携	令和7年度のカリキュラムにおける複数プログラムを活用した「履修証明プログラム」の検討
	運営体制の整備＜機能性の強化＞	学内の他のセンターの設置状況も勘案して検討する（グローバル教育に関するセンター設置の検討）。
B	なし	なし
C	マーケットの開拓・拡充	大妻、共立、戸板など実績のある短大には、担当事務局に直接依頼を行い、収容定員の回復を行う。
D	研究環境・体制の整備	若手研究者研究費助成を受けた研究者を対象に、研究成果物の報告会の実施について、学術研究委員会で検討する。
E	なし	なし
F	多文化共生の促進	国際交流センター映画上映会の実施
	海外の大学との連携拡充	海外協定校の新規開拓
G	なし	なし

表3 検討着手の重点事項と具体的施策

	R6年度重点事項	R6年度重点事項の具体的施策
A	成績評価の厳格化及び透明性の確保	ループリック導入の効果について検証する。
	教学 IR 体制の整備	内部質保証に資するデータや資料の収集・作成時期、活用方法の明確化
B	学修・学生支援の充実	1年生キャリア面談の実施
C	入試・広報の強化	外国人留学生の確保のために、都内および神奈川県内の日本語学校を早期に訪問する。 海外提携大学と協議し、本学への留学制度を検討する。 接触者の個人情報把握の徹底と、ターゲット層に応じた継続的な広報活動を行い、OC参加、出願に結びつくようにする。 OC来場者アンケート内容の見直しと、回収率を抜本的に改善し、OCと募集活動の改善に結びつくようにする。
D	研究環境・体制の整備	年2回、researchmapへの登録案内を周知する。
	外部資金獲得の促進	クラウドファンディングにチャレンジする教員のサポート体制を整えた。 科研費の申請時期が早まっているため、申請書類の点検・相談の実施時期等を検討する（勉強会の開催など）
	若手研究者育成制度の拡充	委員会で過去3年間に若手研究者等研究費助成を獲得した者に、聞き取り調査を実施するためのアンケート内容の作成。アンケートの実施。結果をもとに委員会で改善内容の検討。
E	高大連携事業の拡充	森のようちえん等を活用した高校生講座の充実
F	なし	なし
G	学修基盤の整備	教職カルテのポートフォリオを、全学的に展開していく。 ティーチング・ポートフォリオの導入の検討 ディプロマサブリメントの内容の検証

<次年度に向けて>

「教学に係るアクションプラン」については、私立大学等改革総合支援事業に示される改革内容も参照しながら、次年度重点事項の具体的施策等の検討することが必要である。また、目標の達成に向けては、実行計画を明確化することはもとより、連携体制を整備して情報を共有しながら、課題に取り組んでいくことが不可欠である。

(2) 組織レベル

今年度の組織レベルの自己点検・評価については、従来実施していた「教育の質保証チェックシート」の項目から評価の低かったチェック項目を抽出し、焦点化して実施した。具体的には、学生の学修成果に力点を置いた自己点検・評価に向け、「ファカルティ・ディベロップメント (FD)」 「成績評価」および「学修成果」の3項目である。

なお、昨年度「いいえ」の回答が多かった「情報リテラシーに関する科目の開講」「データサイエンス教育を行う数理・データサイエンス・AI に関する科目の開講」「ディプロマサプリメントの取組」については、「情報リテラシー基礎」「データサイエンス入門」「デジタル&AI 基礎」を令和7年度の共通教育科目に導入(「キャリア実践演習1(学内)」「キャリア実践演習2(学外)」もキャリア教育に導入)しており、「ディプロマサプリメント」は、令和5年度より発行しているため、チェック項目から外している。

また、大学の取組みの有効性・達成度を重視する評価とするために、「はい」「いいえ」を回答するのではなく、「いいえ」の回答については、「全く対応していない」「計画中(検討中)」「計画は終了し実行している途中である」のチェックとし、見直し予定等今後の方向性について記述するシートに修正した。また、第4期認証評価のポイントから、学生の意見を取り入れた評価、特色ある取り組みの評価、効果的・効率的な評価の視点を取り入れ、さらに、文科省の提言等の記載にあわせ、FDの項目にある「教育」を「教育研究」とすると共に、本学のFD委員会規程に則り、「社会貢献」を加筆した項目・シートとしている。

1) ファカルティ・ディベロップメント (FD) について

組織レベルにおけるFDに係る優れた取組み事例を、以下に挙げる。

① 部局(学部・学科・研究科)独自で実施している「教育研究」や「社会貢献」に係る

FD活動の概要(実施内容・方法、参加者数等)

【生活デザイン学科】

教育研究については、初年次教育として1年次の必修科目として開講している「生活デザイン演習A」「生活デザイン演習B」を、学科の全教員が担当している。毎年、学科教員全員が参加して、授業の成果発表会と振り返りを行い、次年度の授業改善に努めており、その一部は、これまでに大学紀要でも発表してきた。また「生活デザイン演習A」「生活デザイン演習B」の成果発表会は、教員相互の指導内容についての確認を兼ねている。

【児童学科】

社会貢献を通じた学生の育成を目指した取り組みでは、子ども体験塾のイベント開催がまず挙げられる。これは、地域の子どもたちに多様な学びの場を提供するとともに、本学の学生の育成を目的としたものである。当日(10月19日)は、子どもと大人合わせて200人を超える来場者があった。このような実践活動を準備段階から計画していくことは、教員と学生が共に授業内容の質を向上させていくことにつながると考えている。

教育研究の面では、本年度新たに「児童学科教育研究報告書」を作成した。これは教員の研究成果の報告だけでなく、地域社会貢献のイベントや活動などをまとめたものである。児童学科で

は、教員や学生の研究成果を広く社会に還元したいとの思いがあり、それをまとめ発信していくことで、研究力や教育力の向上にもつながると考えている。

【人間栄養学科】

人間栄養学科勉強会を開催している。

【大学院】

大学院生に対する授業評価に係る個別面談を実施。実施した大学院生 3 名（大学院生 4 名中 1 名は休学中のため 3 名全員に実施）。各教員の研究内容を公開し、大学院生の研究活動の選択につなげている。

② 部局独自の「教育研究」や「社会貢献」に係る FD 活動の参加率を上げるために実施している取組み

【生活デザイン学科】

専門分野に幅がある学科なので、学科内の学びについての教員と学生の間の共通理解を深めることが FD の取り組みの第一歩と考え、1 年次の生活デザイン演習 A・同 B、卒業研究の発表会は 1 つの発表会場で全教員が参加して実施している。また卒業研究の発表会については、可能な範囲で 3 年生以下の学生にも出席を呼びかけている。

【人間栄養学科】

人間栄養学科勉強会において、それぞれの教職員の知見を持ち寄り教育効果向上への取り組みにつなげている。授業のない月（3 月、9 月）の学科会議の前の時間帯を開催時期とすることで、参加しやすいようにしており、部分参加を含め昨年 3 月は 25 名中 24 名、昨年 9 月は全員の参加で開催した。

③ ヒアリングなどを通して学生の意見を聞き取る機会を設け、授業改善に活かしている取組み

【食物学科】

学生の意見は随時担任やゼミ担当者が聴取している。それが学科会議で報告される場合もあるし、直接教科担当者に伝えられる場合もある。

【全学科】

各クラスの担任が定期的に学生との面談を実施し、必要に応じて学科会議で情報共有を行っている。

【大学院】

学修・研究環境に対する要望がかなりあり、すぐに改善できるものは学務を通じて改善した。

<次年度に向けて>

各部署において、多様な取組みが実施されている。ゼミ等の熱心な取組みが授業改善につながっていることは明らかであるが、内部質保証推進委員会委員からの意見にあるように、それを学科組織に広げるための仕組みづくりが課題である。また、学科全員が担当するような科目においては、生活デザイン学科の報告にあるように、授業の成果発表会と振り返りを学科の全教員で行い、次年度の授業改善につなげるような取組みを全学的に展開していくことが期待される。一方で、FD の

多様なあり方についての認識を広げることにより、組織レベルでの自己点検・評価に反映できるようにしていきたい。

2) 成績評価について

成績評価の点検では、次の5つの点検項目について回答を求めた。

- ① 成績評価基準について、科目の到達目標を考慮した判断基準を組織として定めている。
- ② 学生に対して、成績評価基準を刊行物の配付、ウェブサイトへの掲載等の方法により周知している。
- ③ 学修成果の評価の方針（アセスメント・ポリシー）に照らして成績評価の分布の点検を組織的に実施している。
- ④ 個人指導等が中心となる科目では、成績評価の客観性を担保するための措置を実施している。
- ⑤ 成績評価基準とは別に、成績評価分布のガイドラインの策定や答案の返却、模範解答あるいは採点基準の提示等を行っている。

点検項目①～⑤への回答について、「はい＝3」「計画終了（実施途中）＝2」「計画（検討）中＝1」「対応していない＝0」と数値に置き換えた一覧を表4に示す。

表4 成績評価の点検項目に関する評価一覧

	①	②	③	④	⑤
現代家政	3	3	0	3	3
生活デザイン	1	3	1	3	1
食物	3	3	0	3	3
児童	3	3	1	3	3
人間栄養	3	3	1	3	3
大学院	3	3	0	0	0

組織レベルにおける成績評価に係る優れた取組み事例を、以下に挙げる。全学的に共有し、各組織において参考していただきたい。

【現代家政学科】

クラス担任による個別面談を実施しており、成績不振の学生には特に複数の教員が関わる形で学修指導を行い、成績の評価に役立てている。クラス担任や卒業研究の指導教員が連携しやすいよう、学生の成績情報を共有する体制を整えている。

【児童学科】

卒業研究等の評価についてルーブリックを作成し、共有している。

<次年度に向けて>

全組織において、点検項目3の評価が低い。成績分布に関しては、GPAの分布状況を公表している (https://www.kasei-gakuin.ac.jp/tkgu_cms/wp-content/uploads/2022/04/d3d805e5f33527ea0599906d5250fa35.pdf) が、学科会議等組織レベルでの点検が為されていないと解釈される。各学科において、早急に取り組んでいただきたい。

また、現代家政学科の「成績評価基準とは別に、成績評価分布のガイドラインの策定や答案の返却、模範解答あるいは採点基準の提示等を行っている」か、という点について、ルーブリックを用いて採点基準の提示をしても、授業の内容や形態によっては答案の返却や模範解答を示すことが難しい演習もある。組織的な成績評価を実施しているかとの問いに対して「はい」「計画終了（実施途中）」「計画（検討）中」とは回答できない項目については、相対的に現状に近い「対応していない」を選択せざるを得ない。大学全体の取り組みの中で学科としても検討していきたい。」の回答からは、自己点検・評価に誠実に向き合っている様子が窺える。今回は、「はい」の回答に対し、その根拠資料を求めていなかったのも、学科による評価基準に差が生じていた可能性がある。根拠資料の提示による好事例の共有は、改善につなげることができる。次年度の点検評価に向けて、問いの表現を工夫するとともに、根拠資料の提出を求める必要があると考える。

3) 学修成果について

学修成果の点検では、次の6つの点検項目について回答を求めた。

- ① 標準修業年限内の卒業（修了）率、資格取得の状況、進路状況等を、学部（学科）・研究科として確認し、学修成果の把握・評価に取り組んでいる。
- ② 就職率（進学率）の状況、主な就職先（進学先）を確認し、学修成果の把握・評価に取り組んでいる。
- ③ 卒業（修了）時の学生アンケートにより、卒業（修了）時点の学生に対し、大学等の目的及びディプロマ・ポリシーに則した学修成果が得られていることを確認している。
- ④ 学修成果を可視化している。
- ⑤ 学修成果の点検・評価結果を教育内容・方法及び学修指導の改善のために活用している。
- ⑥ ディプロマサプリメント(学位証書や成績証明書の補足資料)など、各学生が修得した知識や能力等を明らかにするための取り組みを実施している。

点検項目①～⑥への回答について、「はい＝3」「計画終了（実施途中）＝2」「計画（検討）中＝1」「対応していない＝0」と数値に置き換えた一覧を表5に示す。

表5 学修成果の点検項目に関する評価一覧

	①	②	③	④	⑤	⑥
現代家政	3	3	3	0	3	0
生活デザイン	3	3	3	3	3	1
食物	3	3	3	3	3	3
児童	3	3	3	3	3	3
人間栄養	3	3	1	3	3	0
大学院	3	0	0	0	0	0

組織レベルにおける学修成果に係る優れた取組み事例を以下に挙げる。全学的に共有し、各組織において参考にさせていただきたい。

【現代家政学科】

年度初めに各学年で「学びの希望調査」を実施。4 領域および取得資格の希望とともに、既取得資格を調査し、学科会議で報告し情報共有。卒業時に「現代家政学科の学びに関するアンケート」を実施。現代家政学科での学びの満足度等について調査。

【生活デザイン学科】

学科教員で共有するスプレッドシートにおいて、学修状況、所属研究室、就職先等の情報を共有している。

【食物学科】

各授業で学生にリアクションペーパーを配布し、授業終了時に提出してもらいその意見を取り入れている。

【児童学科】

児童学カルテ（マイトレ）を作成し、学生の学びを可視化し、それに対してゼミ担当者がコメントをするなど、学びの履歴やその満足度や要望について把握することを試みている。

【人間栄養学科】

国家試験対策の試験結果や模擬試験の結果の推移や分布の把握、また国家試験合格率の推移などの把握・分析。

<次年度に向けて>

点検項目3の「学修成果の可視化」については、学修状況チェックシステムやディプロマ・サプリメント（卒業時）が教育開発・IRセンターから提供されており、学生はスチューデントプラザから閲覧できるようになっている。現代家政学科の評価が「対応していない」となっているが、各学科がどのように対応しているのかを情報共有するなど、教育開発・IRセンターから提供される情報の活用について全学的に検討する必要がある。

4) 特色ある取組みについて

今年度より、組織レベルにおいて実施している「特色ある取組み」について、成果が出ている内容の記載を求めた。その内容を以下に挙げる。

【現代家政学科】

現代家政は食生活、ハウジング、ファッション、生活者と社会の 4 つの領域から構成されており、生活に関して横断的に学ぶことに特徴がある。領域の内外を問わずにコラボレートする授業が実現できるよう検討を重ね、来年度の「現代生活論」において 4 つの領域を関連付けて具体的に学ぶことを目指して共通テーマを複数設定するなど、異なる領域間の連携を取り入れる試みを行うことになった。

【生活デザイン学科】

地域連携活動に積極的に取り組んでいる。

【食物学科】

地域貢献、学術的貢献、企業との共同研究を実施することに力を入れており、八王子コンソーシアム等の学外の研究発表会で学生の受賞等の成果が得られた。教員採用試験対策講座を年 10 回開講している。就職懇談会を毎年開催し、卒業生と在学生の縦の関係形成に貢献している。卒業研究発表会については、令和 6 年度より非公開化し、卒業研究発表会の参加者が発表内容を発表会参加者以外に漏らすことをしないという誓約をして、知的財産保持に務めている。これは企業との共同研究および学会発表や論文投稿のために必須の手続きであると考えている。

【児童学科】

子ども体験塾、森のようちえん、ぽかぽか広場など、地域に開かれた各種「特色ある取り組み」を行っている。それぞれ地域のニーズも高く、参加者も定員を超える希望がある。

また、学科教員が分担して高校を訪問し、その学びの質と学生の成長について伝え、高大連携につながる取り組みをしている。

【人間栄養学科】

管理栄養士としての社会的役割を早期から理解させることを重視し、1 年次の体験実習から 4 年次の実践型実習に至るまで、段階的・体系的な学習支援を行っている。国家試験対策を実施し、3 年次後期からの個別指導や、成績不振者への特別授業を通じて合格力を高めている。教員による専門分野別の就職支援や学生一人ひとりに寄り添う個別面談を通じ、学修支援とキャリア形成を継続的に支援している。

【大学院】

学生が修士号を取得するまで、例えば中間報告会の開催など、きめ細やかな対応をしている。

<次年度に向けて>

各組織の特色ある取り組みについては、全学教授会等の機会に、それぞれの好事例から学び合う機会を設けることを提案したい。可視化し情報を共有していくことは、他の組織への理解につなが

るとともに、大学全体としての教育の質向上となると考える。

(3) 個人レベル

個人レベルは昨年度と同様に、教員を対象とした「シラバス点検・評価シート」と「個人活動報告書」の2つである。「シラバス点検・評価シート」については、2023 年度に90 分授業から100 分授業に移行したことを受け、その教育（学修）成果について昨年度から記載欄を設けており、今年度も引き続き記載を求めた。「個人活動報告書」については、1 年間の活動を、教育、研究、大学運営、社会貢献の4つの視点で振り返っていただくとともに、昨年度と同様に、次年度の活動計画の欄を設けて実施した。

「シラバス点検・評価シート」の100 分授業の教育成果については、「100 分という授業時間を効果的に使うことの難しさを感じている」という記述が若干数あったが、ほとんどの記述に授業内容の工夫や効果が記載されていた。加えて、不十分であった点をどのように改善するかといった、次年度に向けての前向きな記述も見られた。具体的には、「前回授業の要点の振り返り」や「振り返りのための小テスト（学生の理解度を確認する）」、「学生間の意見交換」や「ディスカッション」、「授業のまとめやリアクションペーパーを書く」時間などに充てることで教育効果が上がった、「学生にマイクを持たせて発言させる」時間を設けることで学生の理解がさらに深まったなどである。このような好事例をFD 活動として学科あるいは全学的に共有し、授業方法・内容の改善につなげることができると考える。また、昨年度の自己点検において、後期開講科目については学生による授業評価アンケートが間に合わなかったため、提出期限を遅らせることを検討したが実現に至らなかった。しかしながら、昨年度に比べ、今年度は内部質保証推進委員会委員によるチェックが短期間で可能であった（1 週間短縮）ため、次年度には提出期限を1 週間延ばすことを検討したい。

「個人活動報告書」については、今年度も1 年間の活動状況について非常に丁寧にかつ、詳細に記述している報告書が多くみられた。個人の研究活動に対する抱負だけでなく、例えば、「学生が小さな達成感を実感できるような授業、課題、ゼミの構成を考えていきます。これまで調べたり、学んだり、学びや自分の考えを伝える機会をあまり持ってこなかった学生にこそ達成感を実感してほしいと思います。」など、丁寧な教育の実現に向けての記述も複数あった。学生の授業への満足度は、こうした教員の姿勢に支えられているのだと思う。学生一人ひとりの成長を支援する本学の伝統が、これからも引き継がれていくことを期待する。一方、「大学運営に対する時間配分が大きく、研究時間が少ない。大学教員の重要な職務として研究活動への貢献が低いと、改善する必要がある。」といった内容が、町田キャンパスの准教授や助教の記述から複数見られた。組織としての検討が喫緊の課題である。

4. 外部有識者からの質問・意見等について

2024 年度の自己点検・評価活動についての、外部有識者および外部評価員（組織レベルのみ）からの質問や意見は以下の通りである（下線は、優れていると評価いただいた内容である）。示唆に富む質問・意見を内部質保証の改善につなげていく必要がある。

(1) 全学レベル

【主要課題 A：教育のさらなる充実と内部質保証の確立】

【A1】教育プログラム・制度の充実において、「授業実施方法改善のための研修実施」「CAP 制度の緩和に係る対象科目の選定」の 2 つが優先度の高い理由を教えてください。

【A1】ワークショップの要件として、対面であることが挙げられていますが、どのような理由によるもののでしょうか。

【A2】成績評価の厳格化に関連し、DP と各授業の関係づけ、DP と各授業の到達目標の整合性、各授業の到達目標と評価方法の整合性の確認状況を教えてください。

【A3】教育の質保証の実質化のために、授業評価アンケートとループリックを重視されている理由、教育表彰に学生が参画することの意義を教えてください。

【A3】学生満足度の中央値が到達目標を達成している点は素晴らしいと考えます。授業アンケートの回収率が十分に高くないとありますが、改善策としてどのようなことを想定しているのでしょうか。

【A3】アンケートにおける自由記載意見の分析はどのような方法で行っているのでしょうか（たとえば、意見の分量が十分あれば、生成 AI の活用も有効だと考えます）。

【A3】単なる「教員像」ではなく、教員の人材育成方針が策定されている点は素晴らしいと考えます。

【A3】学生 FD 懇談会等については、今後の開催を期待したいと思います。

【A4】教学データの把握状況、活用検討状況を教えてください。

【A5】多様な教育体制と社会との連携において、「千代田区大学コンソーシアムへの科目提供」「履修証明プログラムの検討」の 2 つが優先度の高い理由を教えてください。

【A6】運営体制の整備＜機能性の強化＞の主目的を教えてください。

【主要課題 B：学生支援の充実】

【B1～B2】エビデンスが無いようですが、とくに収集・整理していないのでしょうか。

【B1】GPS-A(GPS-Academic)の 3 年次の受検率が下がっていますが、1 年次と同様に授業内で実施し、受検率を高めることは難しいのでしょうか。

【B1】GPS-A を利用する目的を、大学および学生の 2 つの視点から教えてください。

【B2】ノート PC の必携化に伴い、授業内でノート PC を使用する授業割合、学生のノート PC 持参率について教えてください。

【主要課題 C：学生募集の戦略的強化】

【C1～C3】協定校向けの教育コンテンツ（探究学習）の提供は、教育面での実質的な関係性強化として素晴らしい取り組みだと考えます。

【C1～C3】協定校以外の高校の掘り起こしも積極的に展開されている点は素晴らしいと考えます。

【C1～C3】高大連携に関わる活動を精力的にされていることがエビデンスからわかります。高校との関係強化の実績として、協定校、最重要校および一般重要校からの入試区分別入学状況を教えてください。

【C1～C3】学生募集の戦略的強化の実績として、2025 年 4 月入学手続き者の入試区分別入学状況を教えてください。

【C1～C3】全体的にエビデンスが豊富な点がすぐれています。

【C2】高校訪問の大部分は外部人材への委託だったとのことですが、具体的にどのような活動（委託内容）だったのでしょうか。

【C3】学生広報スタッフ Roses のオープンキャンパスにおける活動の強化をはかり、若い世代の知恵やアイデアのさらなる活用を期待したいと思います。

【C3】外国人留学生を受け入れることの意義、受け入れ支援体制等について教えてください。また、アサーティブプログラムにおけるプログラム成果検証、特にグループディスカッションや面談の詳細について教えてください。

【主要課題 D：研究力の強化】

【D1～D3】研究力の強化のために、「研究環境・体制の整備」「外部資金獲得の促進」「若手研究者育成制度の拡充」の 3 つを重点事項においた理由を教えてください。

【D1～D3】エビデンスが無いようですが、とくに収集・整理していないのでしょうか。

【D1～D3】さまざまな取り組みはされているようですが、対象者や申請者が少ない原因は把握されているのでしょうか。研究者個人へのニーズ調査に基づく行動計画等の見直し等はされているのでしょうか。

【主要課題 E：多様なステークホルダーとの連携強化】

【E1～E2】千代田キャンパスコンソを中心に多くの連携活動をしています。活動が充実することで実現したいことを教えてください。

【E1～E3】非常に多岐にわたった活動を展開している点は高く評価できます。「千代田学」はきわめて特色ある取り組みだと思しますので、同じ形ではないにしても、後継事業を検討いただくことを期待します。

【E1～E3】課題研究発表会に小学生が参加し、研究発表を行なっている点は素晴らしいと考えます。一方で、これら多様なステークホルダーとの連携強化の活動の結果が学生募集の戦略的強化につながるような可能性は見出されているのでしょうか。取り組み間の関連（成果の環流）という観点でお尋ねします。

【E1～E3】全体的に、エビデンスが豊富で充実している点がすぐれています。

【E3】高校における探究学習への関与は、担当教職員の負荷が高くなりますが、学生募集において有益な取り組みになると想像します。対応状況について教えてください。

【E4】単位互換により取得した科目と DP との関係が決められていれば教えてください。

【E5】卒業生アンケート結果の在学生への公開による効果について教えてください。

【主要課題 F：グローバル化の推進】

【F1】釜山女子大学文化交流プログラムは好評を博したとのことですが、今後の課題として新たに見出された課題等はあるのでしょうか。

【F1】映画上映会を担当していた教員の退職が大きな原因となり、実施が0件だったとのことですが、大学の取り組みとして人員補充等は検討しているのでしょうか。人員に変更が生じたとしても、行動計画が遂行されるようなシステムの構築が最優先課題になるかと考えます。

【F1～F2】学生の海外経験を促進するうえで、学生の費用負担軽減は必要不可欠な施策ですが、その点の検討状況や将来展望を教えてください。

【主要課題 G：教育研究のDX化の促進】

【G1～3】エビデンスが無いようですが、とくに収集・整理していないのでしょうか。

【G1】小学校・中等教育課程への教職カルテ導入は困難であると判断されたとのことですが、どのような理由によるもののでしょうか。

【G1】教育研究のDX化に関わる学修基盤の整備において、「教職カルテポートフォリオの全学展開」「ディプロマサプリメントの内容検証」の2つが優先度の高い理由を教えてください。

【G2】教育研究のDX化に関わる教育研究基盤の整備において、「ティーチング・ポートフォリオ」の果たす役割について教えてください。

【全体】

全学レベルの自己点検評価シートの様式が昨年までと変更になり簡略化されたことで、主要課題および重点事項を実施することの意義がアクションプランシートからだけでは読み取れなくなりました。そのため全学レベルにおいては、自己点検評価シートに基づいた委員としての評価結果ではなく、主要課題A～Gについての気になる点をあげさせて頂きました。

教学アクションプランとして一覧化することで、全体の取り組み状況を俯瞰しやすくなった点は評価できると考えます。一方、個別具体の取り組みを行なった結果、それらが総合的に、上位の主要課題の達成にどのように貢献したのかという点がやや捉えにくいようにも感じました。ご検討いただければと思います。

全体的に、エビデンスの提示にややばらつきが見られますので、改善が必要だと考えます。

自己点検・評価の中で何ヶ所か言及されていましたが、内部質保証システム全般にかかわる課題として、それを支える基盤体制の人員に変更が生じたとしても、行動計画が遂行されるようなシステム構築が重要になるものと考えます。具体的施策や到達目標、行動計画がきちんと策定されているだけに、もったいない印象を与えています。

(2) 組織レベル

- ① 本学のファカルティ・ディベロップメントは、教育研究や社会貢献の活性化に寄与するものとなっていると評価できますか。

(評価できる)

教員と学生の社会貢献を通じた教育の質の向上へ向けた子供体験塾や新たに「児童学科教育研究報告書」を作成するなどの児童学科での取り組みや現代生活学部食物学科が外部研究成果発表を行い一定の評価を得ていること、人間栄養学部人間栄養学科では「人間栄養学科勉強会」を開催し、高い参加率により、それぞれの知見を集める機会として教育効果向上へつなげていることなど、各学部各学科を通じた全学での取り組みとして大いに評価されます。また、「内部質保証推進委員会」からも適確な評価と不足事項への丁寧なアドバイスがあり、質の向上を担保しています。

一方で、全体に FD 活動を広める取り組みがやや少ない印象で、せっかくの良質な取り組みを各学部、学科や他大学への横断的な周知の機会があっても良いのではないのでしょうか。

(ある程度評価できる)

学科等によって取り組みに濃淡があるものの、学科全体で取り組む授業を中心に、組織的に意見交換、授業改善に取り組んでいます。教員個々の授業改善だけでなく、カリキュラムの整合性整備等に関わる取り組みも昨今は FD とみなされるので、学内における FD の定義を再検討してはどうでしょうか。

院生が少人数であるものの、授業評価に係る個別面談を実施したことは興味深く、学部生についても何らかの組織的取り組みをしてはどうかと思いました。

(ある程度評価できる)

児童学科、人間栄養学部人間栄養学科、生活デザイン学科、大学院（人間生活研究科）において、それぞれの専門性や特徴を活かした学科レベルの FD 活動が活発に展開されている点は評価できます。現代生活学部食物学科はゼミレベルの活動が活性化している点がすぐれています。

上記以外の学科（領域ごと）の FD 活動の実施は、今後の課題だと考えます。それぞれの学科の特徴にそくした学生参加（意見聴取や学生参画等）のあり方を追求していただくことを期待します。

- ② 本学の成績評価は、カリキュラム・ポリシーに則して、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているものとなっていると評価できますか。

(評価できる)

全般に貴学のカリキュラムポリシーに即した公正な成績評価が展開され、総体的には評価できますが、アセスメントポリシーに照らした成績評価の分布の点検を組織的に周知しているかについては、3 学部学科で計画（検討）中とし、2 学部と大学院では、対応していない点については不足を感じます。

ただ、その中でも、モデル授業を作るとしているところやデータ構築中であるとするところ、実施するまでの手順、課題の整理に着手している学科があるなど、前向きな姿勢は伺え、

評価に値します。

(ある程度評価できる)

成績評価分布の確認は、各授業のレベルで想定されているように推察しますが、各 DP・成績全体のレベルでも確認されてはどうでしょうか。

卒業研究等で学科統一のルーブリックを用いている学科がありますが、大学院を含めてまだ浸透していないようです。

授業アンケートの実施や、担任等による学生からの意見聴取はされていますが、カリキュラムに関わる学生からの意見聴取もされてはいかがでしょうか。

ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの一貫性を担保し、ディプロマ・ポリシーの各項目の修得を担保する主要授業科目を設定した方が良いです。

(ある程度評価できる)

カリキュラム・ポリシーに則して、公正な成績評価の実現に向けた取り組みが進められている点は評価できます。

成績評価のデータを活用し、成績不振学生に対する組織的かつ丁寧な対応が行われている点も評価できます。

一方、とくに成績評価の分布の点検について組織的な対応がなされていない（あるいは計画（検討）中）学科が見受けられますが、それがどのような理由によるのかが気になりました（学生数の少ない大学院は除く）。学科として、全体的な成績評価の状況を俯瞰・把握することは重要かと考えますので、ぜひご検討いただければと思います。

- ③ 本学の学修成果は、大学等の目的及びディプロマ・ポリシーに則して、適切な学修成果が得られているものとなっていると評価できますか。

(評価できる)

大学等の目的及びディプロマ・ポリシーに則した貴学の志向する適切な学修成果が、得られており、全般には評価できます。ただ、一部で、学修成果の可視化への対応が見られないことや学修成果の点検・評価結果を教育内容・方法、指導改善に活用できていないとする学科もあることには改善の余地があります。

一方で、大学院での学修成果については、学部・学科と同じ評価基準には当てはまらない可能性を感じました。

(あまり評価できない)

各種調査等で学修成果の確認をしています。学修成果の可視化にまでは至っていません。ディプロマ・ポリシーの達成をどのように確認して可視化するのか、早急に検討・実現することが望まれます。

(ある程度評価できる)

学科独自のアンケートを実施する等、工夫を凝らした取り組みが進められている点は評価できます。

一方、学修成果の可視化にかかわる取り組みがやや低調な学科も見受けられますので、他学科のグッド・プラクティスを共有しながら、全体的に推進することが必要だと考えます。

- ④ 本学の学科・研究科など各組織で行っている特色ある取り組みには、教育の質を高めるものとなっていると評価できますか。

(評価できる)

現代生活学部現代生活学科での「食生活」「ハウジング」「ファッション」「生活者と社会」という異なる4領域での連携を取り入れる取り組みや児童学科での「子ども体験塾」「森のようちえん」「ぽかぽか広場」などの地域に根差した活動、生活デザイン学科で実施されている卒業生と在校生の交流の場としての「就職懇談会」や「卒業研究発表会」、大学院での中間報告会でのきめこまやかな対応など各組織で行っている様々な特色ある取り組みは、教育の質を高めるものとなっていると評価できます。

ただ、生活デザイン学科で行っているとしている「地域連携活動」は具体的な活動内容が示されず、評価ができなかった。

(ある程度評価できる)

【現代家政学科】「現代生活論」において4つの領域を関連付けて学べるよう、異なる領域間の連携を取り入れる試みを行っている。

【生活デザイン学科】「生活デザイン演習 A、B」において、学科教員全員が成果発表会と振り返りに参加し、授業改善に活かしている。

【食物学科】就職懇談会を毎年開催し、卒業生と在学生の縦の関係形成に貢献している。

【児童学科】「子ども体験塾」等の地域に開かれた取り組みを行っている。

【人間栄養学科】年に2回の学科独自の勉強会を開催し、授業改善に活かしている。

【大学院】院生全員に対し、授業評価に係る個別面談を実施している。

(評価できる)

【現代家政学科】学科内の異なる領域間の連携をはかることによって、学生の学修成果に一層の幅を持たせている点が評価できます。

【食物学科】卒業研究発表会の非公開化によって、学生の知的財産保持の意識を高めようとしている点は評価できます。

【児童学科】高校訪問の際に、学びの質や学生の成長等の教育の内実にかかわる具体的な情報を伝え、実質的な高大連携につなげている点は評価できます。

【大学院】中間報告会を開催する等し、修士号に至る歩みを段階的に支援している点は評価できます。

- ⑥ その他お気づきの点等ございましたら、ご助言等をお願いいたします。(自由記述)

全体を通じ、貴学の理念や方針がよく浸透しており、内部質保証、教育の質保証が担保され、また、その自己点検・評価方法も適切であると思いました。各組織で行っている特色ある取り組みも多く、もっと積極的に外部へ発信しても良いのではないのでしょうか。

全体的に、エビデンスの随所から学生さん個々人のがんばりがよく伝わってきました。これらは教職員の方々の取り組み成果を間接的にあらわすものかと考えます。上記の所見で指摘した事項について、今後も取り組みを推進していただくことを期待します。

5. 今後に向けて

(1) 優れた取組みの共有

各組織において、それぞれの組織の特徴に合った内容で数多くの優れた取組みが為されている。それらを共有し、所属組織の取組みに反映したり、合同でFD活動を実施したりすることは、教育の質保証の向上だけでなく、教員の相互理解にもつながっていくだろう。文字による情報共有だけでなく、ワークショップを企画するなどして、対話を通じた学び合いの機会を企画することが望まれる。

(2) 自己点検項目の共通理解

組織レベルの自己点検・評価は、それぞれの組織の長が中心となって記載している。学科長や研究科長の誠実な対応が確認される一方、例えば（組織レベルの（3）学修成果の点検項目にある）「学修成果を可視化している」について、全員が同じ認識で回答しているとは判断しづらい状況にあるように思われる。それぞれの点検項目が意図する具体的な内容を理解することは、自己点検・評価の確実な実施につながっていく。次年度に、内部質保証推進委員会として、「教学マネジメント指針」への理解を深める勉強会の企画を検討したい。

(3) アセスメント、各種調査の有効活用のためのシステム構築

組織レベルの（2）成績評価の点検項目にある「学修成果の評価の方針（アセスメント・ポリシー）に照らして成績評価の分布の点検を組織的に実施している」についての評価が低いことについては、アセスメントテストや各種調査の結果が組織レベルで検討されるシステムを構築する必要があるのではないかと考えられる。このことについては、「東京家政学院大学 内部質保証体制概要図（案）」に示す改善推進部会で検討し、PDCA サイクルの実現につなげていきたい。

(4) 「教学に係るアクションプラン」の項目整理

今年度は、これまで内部質保証推進委員会を担当していた教育企画室が年度途中で閉じることになり、全学レベルでの自己点検・評価については、従来実施していた「教学に係るアクションプラン」に置き換えて実施することになった。その結果、外部有識者の指摘にあるように、全体の取り組み状況を俯瞰することはできるものの、主要課題や重点事項を実施することの意義が読み取りづらい状況となったことは否めない。従来の様式と並行して実施していくことが理想的であるかもしれないが、例えば、従来の様式と「教学に係るアクションプラン」の項目とを関連付けるなど、「教学に係るアクションプラン」の項目を整理し、わかりやすい自己点検・評価につなげる必要がある。

(5) 往還的な視点による自己点検・評価の実施

項目が細分化されたアクションプランにおいては、個々の課題を達成することに目が向けられがちである。しかしながらそれらは、大学の中期目標・計画に基づいて構成されており、建学の精神及び教育研究上の目的の実現を目指したものである。したがって、アクションプラン

の自己点検・評価にあたっては、ディプロマポリシーに則ったカリキュラムが構築されているか、個々の授業は教育の質を保証し得る内容となっているか、学生は成長値を実感しているかなど、上位の視点から俯瞰する必要がある。また、個人（ゼミ）レベル・組織（教育課程）レベル・全学レベルとの関係について、往還的な視点による振り返りを実施し、全体像を把握することが必要である。

6. 学長による総括

2024年度の自己点検・評価は、「組織レベル」と「個人レベル」についてはこれまでと同様に行った。「全学レベル」については、当初は例年通り、公益財団法人日本高等教育評価機構による認証評価の基準に基づいた自己点検・評価を実施する予定であったが、年度途中の事務組織改編（担当室（教育企画室）の解散）に伴う事務負担を軽減することも考慮して、「事業計画書（中期経営計画に基づいた中期目標・計画を含む）」を起点として「教学に係るアクションプラン」による自己点検・評価を実施することとした。

外部有識者委員からの指摘にもあるように、このことは、主要課題や重点事項を実施することの意義がアクションプランシートからだけでは読み取れなくなったという問題につながった。そして、個別具体の取り組みが、上位の主要課題の達成にどのように貢献したのかという点が捉えにくいという指摘もあった。これは、往還的に上位の視点から俯瞰することの重要性と必要性の指摘でもあり、次年度以降、留意したい点である。また、内部質保証システム全般にかかわる課題として、それを支える基盤体制の人員に変更が生じたとしても、行動計画が遂行されるようなシステム構築が重要であるという点についても、今後留意して臨みたい。

組織レベルにおいて、学修成果の可視化についての回答のように、学科間で回答が大きく異なるものがある。その理由として、教育開発・IRセンターから提供される情報が、学生や教員によって十分に活用されていないことが考えられる。学生が学びの成果を視覚的に確認できるシステムとして、本学独自の優れたシステムが構築されていることから、その活用度を高める工夫をしていきたい。

新たなシステムでの自己点検・評価の活動が4回を数え、この4年間を振り返りつつ、次年度への取り組みにつなげていきたい。具体的には、本報告書の「5. 今後に向けて」に整理されている今後の取り組みを中心に、本委員会および部会にて検討を行い、自己点検・自己評価に基づく教育の質保証、すなわち内部質保証の活動を推進していきたい。

これまでと同様、外部有識者委員および外部評価員には、資料に丁寧に目を通していただき、多数の質問や的確な指摘に加えて、温かい激励をいただいた。心より感謝申し上げる。